

●一般の部 知事賞

【短歌】

ゲルニカの鳥はピースと鳴くという今年終戦七五年なり 水津吉子

ゲルニカは一九三七年にドイツ軍により無差別爆撃を受けたスペイン北部バスク地方の町で、それへの憤りからパブロ・ピカソの製作した壁画が知られています。またピースと鳴く鳥とは、これもスペインのチェリストであるパブロ・カザルスの演奏で知られるようになったカタロニア民謡「鳥の歌」が背景にあります。カザルスはこの曲を弾くときに「カタロニアの鳥は、ピースピースと鳴くのです」と語りました。バスクとカタロニアで地方は異なるのですが、二人のパブロを接点に〈戦争〉を改めて想起しようという歌になっています。戦争体験を語り継ぐことが次第に難しくなっている現在、芸術作品のこうした力への信頼をも読むことができます。我々の歌も、そういう志を持ちたいと思わされます。ただ下句の言い方は、どんな上句にも付くのではないか。さらに作者の顔が見えないのではないか、という議論があったことも事実です。それでも「ゲルニカ」「鳥の歌」という二つの固有の存在が、歌を支えていることは間違いありません。

【俳句】

この星に生死をゆだね天の川 小村たつ子

天の川を仰いだ記憶はその時々的心情によって心に感動を与えている。秋の夜空にかかった天の川を美しいと見るか悲しみの眼で見るとは個人のその時の心情次第であろう。

掲句はこの世に生を受けそして死んでいく、それが人の定めであるのでそれに従う。しかし天の川は悠久である。変わらぬものと変わるものとの対比が読む者の詩情を豊かにさせている。

【川柳】

当たり前の日々ありがたく鯖を焼く 西 博美

新型ウイルス禍に、全世界が翻弄された一年になった。改めて、日常生活が平凡な日々だったとしても、感謝する事の意義を悟った作者。下五の「鯖を焼く」の表現に魅了される秀逸な作品である。

【詩】

『春のゆくさき』 升田 孝司

かつての道が、行くあてのない散歩道となった。道のない道を想起しながら自分への問いかけが表現されている。作者は詩を書く自分の形をもっている。この形から、次にどのような形を生み出していか期待したい。

【散文】

『クサイエ島』 猿木浩二

太平洋戦争で、苦難に見舞われた家庭は多い。百歳近い姉が、九十歳を超えた弟の戦争体験を掘り起こして書いた。召集、満州、南海の孤島の守備隊への転戦。絶滅は免れたものの、補給路を絶たれ餓死寸前で生き残った弟が、今は平和の大切さを訴える講演活動をしている。胸に響く作品である。

●ジュニアの部 大賞

【短歌】

真っ青な空をキャンパス絵を描く毎秒毎秒新しい雲 能美 まり

見立てが良い。青空をキャンパスにして雲の動きを自分が絵筆を動かしているかのような想像力は比類の感性。新しい雲は生き生きとして躍動感があります。

【俳句】

盆踊りたいこの音が響く夜 下瀬 奏子

盆踊は町村の広場やお寺の境内で中央に櫓を組み、その上で音頭取りや太鼓打が囃すと、その櫓回りを踊子が手振りよろしく踊るのである。

農山村の最大の娯楽であったが、今年は新型コロナウイルス感染症のため規模を縮小し新盆の家を訪問しその庭先で亡き人を偲んで踊りが続いたのであろう。

【川柳】

背のびしてちょっと大人になってみる 大谷 凜々花

年頃になると少し好奇心が芽生え、背伸びして、大人の世界を覗いて見たくもなってくる。素直な表現でとっても好感が持てた。誰もが共鳴してくれる、素敵な作品に仕上がりました。

【詩】

『さくら』 綾部 由侑子

この詩で好感が持てたのは、「ふつうのさくらではない／さくらをかんじた」と表現しているところ。作者のすばらしい感性ですね。